

心理学研究方法論をめぐる省察

—多種多様な心理学の統合の可能性—

吉田章宏

はじめに

この論考を、先の論稿の終わり（吉田章宏2003：163）に私が深く共感する文章として挙げた英文の和訳を示すところから始めたい。すなわち、それは以下の通りである。

「私は、過去数年に渡って次第に次のように認識するようになってきた。すなわち、人間の知識の問題は、[自らの見解に] 対立するさまざまな諸見解に [自らも] 反対し、それらを粉砕することではなくて、ある一つのより大きな理論的構造のなかに、それら [対立する諸見解] を包含することである、と。」（Becker, Ernst, 1973.:xi）

私は、時を経るにしたがって次第に、この著者の見解に強く共感するようになった。つまり、ある理論が、それと対立する別の理論を如何に粉砕するかということよりも、ある理論とそれと対立する別の理論とを、共に包含する「より大きな理論的構造」を求めることに、私は、より深い関心を抱くようになった。私は自ら確信の持てる心理学を探し求めて多種多様な心理学を尋ねて遍歴あるいは放浪してきた（吉田章宏, 1996：Yoshida, A., 2001）。そして、つぎの1）、2）と3）を、心から確信できるようになった。すなわち、1）それぞれの心理学に、それなりの存在理由があること、2）それぞれの心理学を学び研究している人々が、少なくともある時点においては、それぞれを確信し、それぞれに真剣に取り組んでいること、そして、3）人間の知には、視点による不可避的な制約があり、必ず限界があること、以上である。私の「より大きな理論的構造」を求める関心は、これら、1）2）3）を確信するに至ったことによるものである、と私は考えている。そして、この私の関心はまた、これまで存在した多種多様な心理学を統合する心理学への憧憬へと変容して行くことになる。では、心理学における「人間の知識」において、「ある一つのより大きな理論的構造」とは何でありうるか、また、どのようにすれば、そこに到達する道が開かれて来るのか、こうした問題を、本稿では、省察してみたい。

1. 多種多様な心理学を統合する道の多種多様性とその秩序化

多種多様な、多くの場合多少とも相互に区別され、しかも対立し合う、さまざまな心理学のすべてを統合し包含する「一つのより大きな理論的構造」は、これまた多種多様であるのかもしれない。しかし、仮に、そうした「一つのより大きな理論的構造」が複数存在しえたとして、それらが万が一にも互いに対立し合うとしよう。すると、その対立をさらに一段高いところから眺めてみるならば、それらの「より大きな理論的構造」が互いに対立し合うということは、それぞれが目指しているはずの理論的構造の基本性格に、つまり「それら [対立する諸見解] を包含する」という性格に、論理的に矛盾するということは、明らかであろう。そこで、仮に、全体的な統合に至るまでの過程で、人間知の不可避的な制約と限界により、一時的には互いに対立する「より大きな理論的構造」が多種多様に現われたとしても、いずれは、そうした多種多様な複数の「理論的構造」も、次第に、「一つのより (一層) 大きな理論的構造」へと包含されて行って、単一の「ある一つのより大きな理論的構造」が成立する、という展開・発展の道筋を、予め見通して考えるのが、論理的に一貫しているのではなからうか。そう考えられもする。

しかし、さらにまた、仮にそのような「理論的構造」が究極的には一つであるとしても、まだ、それを見いだしていないある特定の地点から、究極のその地点に到達するに到る道筋には、これまた、多種多様あるに違いないと、ひとまず想定される。少なくとも、どこから出発するかによって、その道筋は異なるであろうし、さらに仮に同じ地点から出発しても、多種多様な道筋が恐らく可能であるだろうからでもある。そこで、そのように錯綜した道を探らし探究する旅に出発するに際して、見通しも立たぬまま闇雲に歩き出す前に、そうした道筋の多種多様性、それらを統合し包摂する「より大きな理論的構造」のイメージを、漠然とであるにせよ、予め描くことを試みて旅たちへの準備とすることは無駄な試みではないであろう、と私は考える。

2. 多種多様なもろもろの心理学を包括するもろもろの構造

多種多様な心理学が、これまで発展し、現在も並存している。そうした状況の下では、時代の最先端を行くとされるある「新しい心理学」を信奉する立場からは、同時代のある既存の「旧い心理学」は、既に滅び去った過去の遺物にすぎぬ心理学であると、公然とあるいは密かに、蔑視される。が、その滅び去ったとされる過去の心理学を現在も引き続き信奉する立場からは、逆に、そうした最先端を行くとされている心理学は、ただ単に時代の流行に軽薄に便乗しているに過ぎず、いずれ泡の如く消えて去って行くべき、信ずるに足らぬ、浅薄

な心理学であると、これまた公然とあるいは密かに、蔑視されたりする。こうして、望まれる「健康な競争」状況というよりはむしろ公然あるいは非公然の「相互蔑視」の状況、あるいは、その両方を含んだ状況が、これまでも、繰り返し見られた(Keen, E., 2001: 4)。例えば、意識心理学から行動主義心理学への移行、行動主義心理学から認知心理学への移行、さらには、第三勢力と呼ばれた人間性心理学への移行、それぞれにおいて、さらにそれらの並存において、長年にわたって、こうした状況を私は見ることができた。あるいは、弁証法的唯物論心理学と観念論的心理学(意識主義心理学と行動主義心理学)の間でも、さらには、近年では、実験心理学と臨床心理学の間でさえも、こうした状況を、私自身、身近に経験して来ている。そして、そうした「相互蔑視」の状況は、多種多様な心理学が並存する限り、恐らく、これからも、繰り返し見られることであろう、と考えずにはいられない。それが、神仏ならず、限られた浅知恵しかもてない人間たちが営む心理学の学界という相対的に「小さな世界」の業(ごう)とも性(さが)とも、考えられる。しかしまた、優越感を求める「健康な競争」を装った「相互蔑視」が、根底において、これまでの心理学の「進歩」を動機づけて来たのかもしれない、とも思う。

ともかく、こうした状況にあって、たとえば、それぞれの立場に向かって、現在も並存する多種多様な心理学を包括する「一つのより大きな理論的構造」を構想することを、仮に、強く求めるところから始めるという接近を採用したとしよう。すると、それぞれが信奉する自らの立場をより高く評価して位置づけるような「より大きな理論的構造」を、それぞれに、構想することになるのが、これまた、論理的な帰結というものであろう。それぞれ、自らの立場の心理学を、他の立場の心理学よりも、より低く評価して位置づけるような「構造」を構想することは、自らの立場の心理学を信奉するということと、論理的に矛盾するであろうからである。言い換えれば、現存する多種多様な心理学のいずれの立場にせよ、そのうちのある立場に立つ心理学者が構想する「構造」は、自らのよって立つ立場への信奉と論理的に矛盾することを避けようとするものと仮定することが仮に許されるとするならば、その構想する「理論的構造」は、必ず、それぞれ自らの拠って立つ立場の心理学を価値的に高いものとする序列的評価づけを内包するような「構造」となるであろう、ということになる。そのことは、多種多様な心理学のそれぞれが、それぞれに構想する「構造」は、相互に矛盾することになるであろう、ということを経にして必然的に意味している。そして、そのいずれも、自らの立場以外の心理学を信奉する立場を心服あるいは納得させるには至らないであろう、ということをも意味する。こうして、「一つのより大きな理論的構造」を求める試みは、以上のような接近によっては、そもそも始める前の最初から、既に、挫折することが論理的必然的に運命づけられていることが明白となる。

「一つのより大きな理論的構造」を求める我々の最初の試みは挫折することが、このように

して、避けられないとする論理と見通しが明らかになってきたこの段階で、少なくともこの段階では無駄とも思われる試み、すなわち、直ちに直接に「一つのより大きな理論構造」を目指す試みは、一旦差し控えて、むしろ、この問題から多少距離を置きつつ、少し回り道をするを試みてみたい。「回り道」は、困難にぶつかった場合に、人間がとることのできる、貴重な知恵の一つである。もちろん、この回り道は、あくまで、目的地に到達することを願っての回り道であって、それを諦めた上での、あてどなくさ迷う放浪となることを決して意図してはいない。

まず、最初の「回り道」において考えることは、そもそも、1) 心理学が、そして、現存の多種多様な心理学が、人間の歴史において、どのようにして生まれて、今日に至っているか、という問いである。さらに、2) 一人の心理学者による心理学や心理学理論への到達が、どのようにして行われるのか、あるいは起こるのか、という問いである。そして、3) ひとり一人の心理学者が、互いに、自らの心理学ではなくて他のいずれかの心理学が構想する「一つのより大きな理論構造」には、満足あるいは納得できないとは如何なる状況であるのかという問いである。以上の問いについて考えた後に、「一つのより大きな理論構造」をめざすことを、再び取り上げて考えることを試みる、という基本方針をここで立てることにする。

この省察においては、論理的筋道の概略を粗描的に明らかにすることを意図し、現在の著者の能力をはるかに超えることが明白な作業、すなわち、膨大な歴史的事実と検証を必要とするであろう厳密な論証の作業は、全く意図していないことを、ここでお断りしておかなくてはならない。

3. 「心理学」が、「前心理学」と共に、誕生し、 時間のなかで流れを成し、世代の間を、流れていく

まず、心理学の研究対象は「心（こころ）」の「理（ことわり）」であるとしよう。

そのような「こころのことわり」を知ることを求める人間の営みは、人間の存在そのものと殆ど同時に始まった、と考えられる。「心理学」の始まりを、標準的心理学教科書どおりに、仮に、いわゆる近代科学としての「心理学」の誕生の年、ライプチヒのヴントによる心理学実験室創設の1879年という年に求めるにせよ、あるいは、『経験的立場からの心理学』(1973/1874年)のプレントナーの1874年に源泉を求めるにせよ、あるいはまた、歴史をさらに遠く遡って、ギリシャの哲人たちに、例えば、アリストテレスの『靈魂論』に、人類の自覚の目覚めとしての心理学の誕生を見るにせよ(南博, 1993)、あるいは、多種多様な聖典(バイブル、仏典など)の世界に見るにせよ、さらにまた、人類の誕生と同時に、既に「心理学」の始まりを見ようとするにせよ、ここで求めている論理的筋道は、そうした具体的事実および

その解釈には、とりあえずは全く依存しない。そうしたことは、敢えて言えば、ここでは、どうでもいいこととして問わないことにするのである。要するに、人間が人間の「心（こころ）」に関心をもち始め、「心の理」に着目をした、その時点で、将来に発展することになる「心理学」の、——そのように呼ぶことが不適切であるならば、「前—心理学」、あるいは「前—心理学」の萌芽の、——誕生という出来事が起こった、と理解する道を選ぶのである。その出来事が、心理学の公的な歴史に記録されていようといまいと、「心理学」（「前—心理学」）の誕生という出来事は現実に起こったのである、という意識的に敢えて選んだ、ある意味では「極めて粗雑な論理」から、ここでの考察を始める。それは、ちょうど、例えば、ナイル川の淵源がどこにあるかを論じるとき、山間の小さな泉からちよろちよろと流れ始めた一筋の水の流れにおいて、はるか彼方に望まれる巨大なナイル川が既にそこに発生している、と考えるか、あるいは、此处こそがナイル川であると万人が認める地点だけが、その淵源でありそれ以外に淵源と呼べるところなどありはしない、と考えるかの違いであって、ここでの議論では、その差異は、敢えて問題としない。いや、加えて、こう言うべきであろうか、その差異を問題としない視点をここでは敢えて採る、と。そして、そのようにして、歴史の記録に残されているかいないかに関わらず、心理学へとつながる人間の経験と認識と思想の流れは、何処とも知れぬ無数の「此处」あるいは「あるところ」から始まり、その流れは、さまざまな紆余曲折を経て、今日の心理学につながっているのだ、そう考える視点を敢えて採るのである。さて、その無数の未知の淵源に始まったこの流れに、個々の心理学研究者は、それぞれの個人的な経緯も加わって、あるとき、「心理学」と呼ばれる学問の流れに、ともに時と共に流れる人々の仲間として加わり、そこに、その研究者らしい研究の成果としての何滴かの水を加える。そうした無数の心理学研究者のうち、限られたある数のものが、その名を「心理学」の歴史の記録に残すことになる、そのように想像してみよう。すると、ここで、明らかとなって来ることがある。それは、「心理学」は真空の状態の中に自然発生的にどこからとも知れず突然に出現したのではなくて、それぞれ特定の時代・社会・文化・世代・伝統の中において生きた具体的な人間の営みによって生み出され、時代時代によって、新たな営みの経験と認識と思想が加えられつつ、全体としては、人類の経験と認識と思想の流れとなって発展して、今日に至っている、という言わば素朴であるが単純明快で明白な、しかし、無視することの出来ない重要な事実である。それは、言い換えれば、ある時代・社会・文化・世代・伝統に属する個々の心理学者は、本人がそのように意識するとせざるにかかわらず、人類の経験と認識と思想の全体的歴史の流れに、みずからも加わる。そして、たとえどのようにささやかであろうと、その流れの一部となって、その人間独自の水滴を多少とも加えつつ、時を隔てて、次の世代の心理学者たちが、ちょうど彼・彼女がそうしたのと同じように、その同じ流れに加わって、その流れの一部となりまた流れ始め流れて行くに

至るまでの一時を、共に流れつつ生きていく、ということである。そうした、人間の無数の具体的な営みの積み重ねなしには、今日の「心理学」は、存在し得ないのである。今日存在する多種多様な心理学は、その流れの今日の時点での、いわば「横断面」だ、と言ってもよいであろう。ここでは、「水の流れの比喩」において、心理学における、「歴史継承」と「世代継承」について、エリクソン(西平 直,1993)あるいはガダマー(Weinsheimer, J.C.1985)が論じている論点のイメージの極めて粗い簡潔な素描が意図されている。さらに、ここで、志賀直哉の文章「ナイルの水の一滴」を加えて、ここでの比喩のイメージを補強しておこう。

「人間が出来て、何千萬年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生まれ、生き、死んで行った。私もその一人として生まれ、今生きているのだが、例えて云えば悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何万年経っても再び生まれては来ないのだ。しかも尚その私は依然として大河の水の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。」(志賀直哉, 647)

「心理学」あるいは「前心理学」の歴史の流れを、無数の人間たちの、そして、その中の心理学者たちの、時代と社会と文化と世代と伝統とを貫く流れと、幾重にも重なり合いながら層を成す流れとして、同様の比喩のイメージとして、まず、捉えておきたい。

4. 心理学者となる人は、そもそも、前心理学者から心理学者へと、育って来た。

ところで、大多数の心理学者は、その人生の最初から、心理学者である、という訳ではないことは、これまた、自明の事実であろう。すくなくともその人生の最初では、将来の心理学者という兆候さえも見せないまま、一人の子どもとして育ちつつあった状況を、それぞれの著名な心理学者となった人々についても、容易に想像することができる。例えば、その名が冠せられている心理学を創造したそれぞれの心理学者の幼少年時代を想像してみればよい。フロイトの『自叙・精神分析』には、フロイト自身の幼少期について、次のような簡単な叙述がある。「私は四歳の子供のときにウィーンに来て、ここですべての学業を終えた。高等学校は七年間首席で通し、特待生扱いで、試験はほとんど免除された。(中略)字を読むことができるようになるや否や早くも聖書の物語に読みふけたことは、ずっと後に分かったことだが、私の関心の方向を根づよく決定してしまった」(フロイトS.,1999/1946.:5)あるいは、『現代心理学の系譜：その人と学説と』(佐藤幸治・安宅孝治編,1975)にも、それぞれの代表的な心理学者の幼少期についての短い自伝的叙述が与えられている。それらの叙述から、想像を大きく膨らませてみることもできよう。そして、例えば、シグムント少年が、一人の子どもとして、「心(こころ)」の「理(ことわり)」について、どのような考えをもっていたかを想像してみよう。その具体的な像そのものを想像することは、具体的で詳細な資料が与

えられない限り、あまりにも勝手に過ぎる作業である。しかし、否定できない点がある。それは、その具体的な個々の内容は我々の想像に余るとしても、しかし、子どもとしてのフロイト少年が、「心（こころ）」の「理（ことわり）」について、「何らかの考え」をもっており、それは、その時点において、その置かれた境涯とそれまでの生活史によって形成されて来たものであったであろう、ということである。以上の点を認めるだけで、ここでの我々の目的には、十分である。すると、ここで、後になってそれと知れることになる、それぞれの未来の心理学者たちが、それぞれに、心理学を志す前に、何らかの「前－心理学」(Pre-psychology)を抱いていたのだ、とすることができる。そして、それぞれの「心理学」は、その「前－心理学」が生涯に渡って発展して行くことで、生まれてきたものである、とすることができる。それぞれの「心理学」は、後になって初めてそれと判明することになる未来の心理学者のそれぞれが、ある志を立て、専門の心理学者あるいは心理学研究者となってから、それぞれの「前－心理学」を肯定し、あるいは否定して、それを忘却し、想起し、時には回想し、意識的あるいは無意識的に克服し、しかし、それをいわば懐かしい「心の故郷(ふるさと)」として、発展させて行く道筋から生まれて来たものであろう。さらに、心理学研究者となつてからも、学生時代に学び親しんだ心理学に、ある幻滅を感じて、反撥したり反抗したりして、他の流派の心理学に移るということも、多くの心理学研究者において、しばしば見られることである。また、特定の心理学者が、多種多様な心理学の何れかに惹かれ、何れかに反撥する、ということ自体も、それぞれの心理学者の個人的な自己形成の歴史のなかで、さまざまに起こる。そして、その理由も状況も多種多様である。ここでは、無数の心理学研究者と多種多様な心理学との関係の、限りない多種多様性とその歴史的流れとが想定されることが確認されれば、それで十分である。

もちろん、こう述べるなかで、実は、私は、私自身が心理学の研究者となって来た経緯を思い起こし、多種多様な心理学のそれぞれに、一人の研究者として、その時々惹かれたり反撥したりして、現在、私が惹かれている心理学との出会いに到達していることを、ひそかに回想しているものである。そして、実は、この文章の読者にも、そのような回想を試みることにしてお誘いしているのである。

そこで、敢えて言うならば、私は、ここで、(A) 個体発生における、個人の歴史における、「前－心理学」あるいは「心理学」の誕生と発展の歴史と、(B) 系統発生における、人類の歴史における、「前－心理学」と「心理学」の誕生と発展の歴史、文化的・社会的歴史、を思い描き、(A) と (B) の交流あるいは交叉、相互浸透、そして、対応関係を粗いスケッチとして思い描くことを課題としているのだ、ということになる。

5. 多種多様に素朴な「前心理学」から多種多様な「心理学」へ

さて、ここで、(α)心理学の歴史において現れて来た、現在に至るまでに存在した、多種多様な心理学と、やはり、(β)心理学の歴史において現れた心理学者たちの個人の生活史における、それぞれの幼少時代の「前心理学」から、それぞれの経緯を経て、研究者・学者としてのそれぞれの「心理学」と、(α)と(β)の双方を視野に収めて考えてみよう。すると、どの「心理学」にせよ、背景となる何の「前心理学」の先行もなしに、突如、この世に現われたわけではないことが見えてくる。もちろん、「前心理学」と「心理学」の対応関係は、決して単純な一致関係でも一対一関係でもないことは明らかである。その間の発展過程には、単なる量的増大のみではなくて、質的变化がある。一人の心理学研究者本人の経験に即して言うならば、憧れ、希望、楽観、心酔、熱狂、信奉、幻滅、失望、絶望、改心、転向などなどが、多種多様に、見られることであろう。にもかかわらず、それぞれの「心理学」が先行する「前心理学」を控えていることは、否定できない。

そして、一人の心理学研究者の生涯発達過程において、本人が「自らの拠って立つ立場の心理学」は、その時々に変化して行ったであろう、と考えられる。例えば、アメリカ主流心理学の歴史において、ヴント・ティチェナー流の意識心理学・内視主義心理学からワトソン行動主義心理学へ、ワトソンの行動主義から新行動主義（ハル、トールマン、スキナー、マウラー、オスグッドなど）へ、新行動主義心理学から認知主義心理学（ピアジェ、ブルーナー、オースベル、ナイサーなど）へ、さらに、人間性心理学（ロジャース、マズローなど）へ、という揺れ動き流れるということが在った。仮に、これと同様に、一人の心理学研究者がその生涯において、「自らの拠って立つ立場の心理学」とする「心理学」あるいは「前心理学」が、多種多様な心理学の間を、時の流れと共に、揺れ動き流れるということが在ったとしても、少しも不思議では無い。

すると、それぞれの心理学者が、それぞれの変化の過程におけるそれぞれの段階において、現実にはありえないことではあるが、仮に、「自らの拠って立つ立場の心理学」を、明示的に示したと想像してみる。例えば、少年フロイトが、少年のときの「心」の「理」についての思いを、あたかも、専門の心理学者がするように、心理学としての理論の定式化を、言語的に表現したと想像してみるのである。また、青年フロイトが、そして、生理学者としてのフロイトが、・・・、と想像してみるのである。すると、それらの心理学もまた、その生涯における時間の流れに沿って、その時々に変化したであろう。ある場合には、時期を異にするとはいえ、互いに矛盾するような対立的な性格をもつ心理学が、一人の個人の発達過程において、出現することになったとしても、これまた不思議は無い、ということになる。例えば、ワトソン、J.B.とても、生まれた最初から、あるいは、心理学を始めた最初から、行動主義

者であったわけでは、決してない。また、例えば、オランダのある心理学者が、現象学心理学から行動主義心理学に移行した例さえある。

では、これらのことは、一体全体、何を意味するか。

このことは、個人の心理的発達において或る特定の段階と、その個人がその段階にある時に「自らの拠って立つ立場の心理学」とするものの間には、ある対応関係が存在する、ということである。もちろん、その対応関係は、前述のとおり、鮮やかな一対一対応などではない。しかし、「自らの拠って立つ立場の心理学」は、一人の人間においても、その人間の心理的発達の段階によって、あるいは発達段階とすることを避けるとするなら、その生涯における心理的变化の過程におけるある一定の状態によって、変化することになる、と言えるであろう。

つまり、個人の心理的状态と、その個人「自らの拠って立つ立場の心理学」とは、決して無関係では在り得ない、いや、ある深い関係があるに違いない、と考えられるのである。

このことを、比喩的に言って、さらに分かり易くすることを試みてみよう。そのためには、話を多少極端にして考えてみる。例えば、「自らの拠って立つ立場の心理学」は、ユクスキュール (1973) に依るまでもなく、狐の場合と、少女の場合や樵の場合とでは、互いに異なるであろう。幼児の場合と、成人の場合とでも、異なるであろう。そして、以上とはまた別の意味と次元においてではあるが、トルストイが『戦争と平和』の最終章で論じた、ナポレオンの場合とロシアの將軍クズホフの場合とでも異なるであろう。ナポレオンにも言及していたブーバーの言う「I-It」(我-それ)の世界と「I-You」(我-汝)の世界の間でも異なるであろう。さらに、一頃、心理学者の間で対比することが流行った、B.F.スキナーの場合とC.ロジャースの場合との間でも大いに異なるであろう。

そこで、もし、人間の心に発達あるいは時間の流れに沿った変化ということを想定できるなら、発達変化する人間が、「自らの拠って立つ立場の心理学」とする「心理学」にも変化発達が起こって行くということを想定することができる。すると、ここに、かすかな光が見え始める。一方に、発達する人間の系列、他方に、発達する心理学の系列、これら二つの系列の間に、ある種の対応関係が考えられるのではないか、という問題の光が、かすかに浮かび上がってくる。

6. 「多種多様な心理学」と「多種多様な人間心理」の間の相互対応性

世に現れている既に確立し「心理学」として認められている多種多様な「心理学」を一方に考える。そして、他方に、それらの「心理学」のそれぞれを、それぞれに、「自らの拠って立つ立場の心理学」とする人間、人間たち、および、それらの人間たちの集団を考える。す

ると、それらの間には、ある対応関係が成立することが、見えてくる。

この対応関係は、もし数学的に言うならば、原理的には、多対多の対応関係である。

そこで、次のような3つの集合からなる対応関係を考えることができる。

これまでの前心理學および心理学の歴史において存在して来た多数の多種多様な「前心理學」と「心理学」から成る集合X

これまでの人類の歴史において存在して来た人間、および、それらの人間から成る集団の集合Y（ここで、一人の人間は、一人の人間から成る集団・集合と考えておけば、同じレベルの要素、人間の多種多様な集団から成る集合と見なすことができる。）

すると、つぎの積集合Zを考えることができる。すなわち、

$$Z = X \times Y$$

さて、積集合 $Z = X \times Y$ のうち、その部分集合として、YがXを「自らの拠って立つ立場の心理学」とするという対応関係Rを考える。さらにその部分集合として現実に存在するXとYとの対応関係をrと表す。すると、

$$r \equiv R \equiv Z = X \times Y \quad (\text{即ち、} r \text{ は、} Z = X \times Y \text{ の真の部分集合である})$$

ここで、 $r \equiv Z$ となることは、明白であろう。例えば、どこからかの任意の幼児に、フロイト心理学そのものは、創造はおろか、想像もできないであろう。たとえ幼児シグムント自身であってさえも、それは無理であり不可能であったであろう。逆に、心理学者としてのピアジェあるいはエリクソンならば、平凡な幼児の「自らの拠って立つ立場の心理学」を、かなり正確に理解し、それを、自らの心理学のなかに位置づけつつ、「自らの拠って立つ立場の心理学」を明らかにすることに困難は覚えないであろう。さらに極端な二つの場合を考えてもよい。たとえば、幼児には、エリクソンの心理学を理解しそれを「自らの拠って立つ立場の心理学」とすることは、ほとんど不可能であろう。逆に、エリクソンが、平凡な幼児の「自らの拠って立つ立場の心理学」をもって「自らの拠って立つ立場の心理学」とする可能性は零に等しいであろう。明らかに、あくまで、 $r \equiv Z$ なのである。

さらに、 $r \equiv R \equiv Z$ であることは、「死せる孔明、生ける仲達を走らす」、「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」、「親の心、子知らず」、「男はみんな狼よ」、「下種の勘ぐり」、「有難迷惑」などなど、人間の相互理解の困難さ、および、さまざまな人間の理解および相互理解の間の差異が極めて大きいことを示す無数の事例や諺などからも示唆される。

さてそこで、これまでのわれわれの問題は、Xをどのように全体として構造化するか、という問題として、再定式化される。ここに、一つの解決への道が浮かんで来る。それは、Yが分割（Partition）され、さらに、その分割されたYが、もし構造化できるなら、その構造化と対応した構造をXに見いだすという間接的な仕方、Xも構造化されうるのである、という解決である。逆に言えば、先の解決不可能であると判明した挫折は、実は、Yについては、そ

の分割も構造化も、序列化も、全く不可能であるという暗黙の前提、思い込み、によるものでなかったのか、という疑問が湧いてくるのである。Yについて、序列化は、果たして不可能なのだろうか。また、もし、Yについて序列化と構造化が可能になれば、Xについての序列化と構造化は、自ずから立ち現れて来るであろうに、そんなことも考え始める。なぜ、Yについての序列化と構造化が不可能であるという先入観、偏見あるいは自明性を当然としていたのだろうか。この種の先入観は、例えば、古代ギリシャの貴族奴隷社会では、また、江戸徳川時代の封建社会でも、生じなかったのではないか、などという感想もふと浮かんでくる。そして、こうしたところにも、時代・社会・文化・世代・伝統の影が落とされることに気づき、私は愕然とする。

ところで、Yの構造化は、心理学のいわば十八番である。それは、心理学の中でも殊に、発達心理学において、多種多様に試みられてきたところである。そこで、Xの構造化のためにここで気づかれた方針は、Xに外在的な何らかの構造を持ち込んできて、それをXに押し付けてXを構造化しようとするのを避けて、むしろ、Xの要素として既にXに内在している個々の要素としてのそれぞれの心理学によって提出されている、Yの構造化を活かして、それに拠りながら、それを透して、Xの構造化を見通そうとすることである、といえる。Yの構造化をしてきた心理学そのものにより、それを通して、それによるYの構造化を活かして、Xの構造化をしてみよう、ということである。さらに、言い換えるならば、多種多様な心理学の構造化を心理学そのものの内部での営みとして行ってみよう、ということである。

ここで、これまで、そうした試みがなされなかったのは何故か、という問いが直ちに心に浮かんでくる。そして、この問いに答えておくことが、ここでの私たちの「多種多様な心理学を包括する『大きな理論的構造』」を求める探究の道をさらに明らかにしてくれるであろうことにも気づく。それは、以下に述べるような諸問題である。

7. 心理学研究の非歴史性の問題

数十年昔のこと、ある極めて真面目な席で、ある心理学者が、「急速な進歩の著しい[自然科学としての]心理学では、初版以来10年以上の年月を経た著作は、すべて図書館から破棄してもよい」、と誇らしげに語って、同席した人文科学・社会科学の他分野の研究者たちをたいへん驚かせたことがあった。しかも、その心理学者は、自らの発言に対するそこに同席した他の分野の研究者たちの驚きを、自らの分野である心理学の進歩に対する驚嘆の現われとして受け止め、誇りをもって眺めつつ、また、他の分野の進歩の遅滞への無自覚の現われとしてさえ受け止めて、自らの発言の意味するところには何の恥じる様子も全くなかった。そのように、私には見えたのであった。たしかに、時々刻々の進歩著しい自然科学諸分野、

——例えば、物理学、化学、薬学、電気工学、など——の友人たちに聞いてみると、理工学書の古書はほとんど市場価値がないらしい。つまり、現代の自然科学研究者の多くは、限られた科学史の専門研究者を除いては、それらを読まないし、従って、現役研究者からの古書への需要は極めて少ない、ということであろう。そして、そのことは、その学問の進歩の著しい速さの誇るべき徴候とさえも、多くの研究者によって見なされているらしい。翻って、心理学においても、精神医学につながる臨床心理学の分野など少数の分野に例外はあろうが、一般的に、多くの分野では、諸心理学や諸理論を、数世紀はおろか、100年昔の心理学の原典にまで遡り、創始者の視点にたつて、歴史的に研究しようという場合は、第一線の心理学研究者では、率直に言って、極めて数少ないであろう。そう思わざるを得ない。米国の諸大学大学院における心理学教育においては、心理学の歴史の教育は軽視されている（米国の心理学界の諸事情に詳しく通じている信頼する友人Giorgi, A.の1980年および1990年の二度にわたる詳しい説明で、私は確認している）。日本でも恐らく同様であろう。これは、原典研究を必須とする哲学研究と縁を切ることで、心理学が、自然科学として独立し、大学の一分科として認知された、というヴントの実験室創設（1879年）以来の歴史的事情、および、それ以降の経緯と状況に、大いに起因し由来しているものと考えられる。

E. Husserlは、その著「幾何学の起源」（フッサール、1974/1954）で、学問の代表として取り上げた幾何学に対して、意識的に克服されるべき課題として学問の「空洞化」の問題を、鋭く提起していた。言うまでもなく、幾何学のすべての内容について、創始者の経験まで遡ってその経験を「再活性化」する様な仕方での学習し伝承することは、幾何学が累積と進歩が膨大な学問であるだけに、不可能であろう。それだけに、フッサールの言う「空洞化」は避けがたい。また、それだからこそ、この問題が深刻な問題として提起されていたのである。ほかならぬわれわれの心理学においても、その意味での学問の「空洞化」が、起こっている。そのことが、「流行による盛衰」と「本質的な纏まりのなさ」を露呈する心理学の「多種多様性」を生んでいる。心理学において、諸々の心理学のさまざまな洞察と知見が受け継がれても、それは、創始者における原経験と重ねあわせ「再活性化」する仕方での修得されるのではない。心理学の伝承には「空洞化」が起こる。「空洞化」によって、創始者の発見した洞察と知見が、その創始者の原経験において発見された時点におけるのとは全く異なる仕方、それに続く研究者たちによって修得されざるを得ないのである。この「空洞化」を克服するには、その後続く研究者が、意識的に、創始者の創建の原経験を「再活性化」する仕方での修得することが必要である、とフッサールは示唆している。しかし、心理学の歴史研究と歴史教育を軽視する現在の心理学において、こうした心理学における「空洞化」の現実を改善することは極めて困難で、見通しさえ立たない状況にある、と私は考える。では、心理学における「空洞化」を克服する方途は、どこにあるか。

歴史的視点の欠落により、現在、現に並存している多種多様な心理学のみしか視野に入らないとすれば、それらがいかに多種多様であろうとも、視野は狭まれており、歴史的に可能だった「心理学」および「前心理学」の集合Xのごく限られた小さな部分集合しか、視野に入っていないことになる。そのため、その狭い視野から得られるはずの「より大きな理論構造」の視野も限定されずにはいない。例えば、行動主義心理学全盛の時代から、新行動主義心理学への移行と多種多様な新行動主義心理学の間の論争は、もし、全人類史的な視野で捉えるならば、まさに小さな「コップの中の嵐」に過ぎないであろう。心理学における流行と盛衰の激しさも、こうした歴史的視野の狭さから生まれている、とも理解される。そして、仮に「コップの中の嵐」を鎮める「より大きな理論構造」かと思われるものがそこで得られたとしても、日をおかず直ちに、さらに別の「コップの中の嵐」を鎮めるための新しい「より大きな理論構造」が求められることに必ずなるのである。

8. 初代の心理学, 2代目の心理学, 3代目の心理学の区別とそれぞれの問題

ここで、研究者の間の、研究における初代, 2代目, 3代目という区別を提案し、そのそれぞれの抱える問題の差異への注意を喚起してみたい。

研究における「初代」というのは、自らが選んだ研究対象に対して接近するに当たって、先行する研究方法もそのままに模倣すべき研究のモデルもないまま、ただ、研究対象を解明するために、自ら研究方法を新たに創造し発明して、研究する研究者であり、さまざまな心理学の創始者たちは、概して、この「初代」に当たる。「2代目」とは、初代研究者の直接の影響下および指導のもとに、初代の発見した研究対象を、初代の研究者の創始した研究方法により研究する研究者たちであって、いわば、「直弟子」とか「門下生」とか呼ばれる人々である。そして、「3代目」とは、初代の発見した研究対象には、もはや必ずしもこだわらず、むしろ、初代が問題とした研究対象からは取えて離れて、初代の研究方法もしくはその改訂版だけを採用し、それにさらに多少の変化を加えつつ、研究方法の伝統の中で、初代のそれとは異なる研究対象を研究する研究者である。初代が「この研究対象を研究するには、どのような研究方法がありうるか」と、研究対象から出発して、未知の研究方法を探究し、ともかくにも自ら「研究法」を発見あるいは創造したのに対して、3代目は、「この既存の研究方法で、何か研究することはできないか」と、評価の確立した既存の研究方法から出発して、初代とは異なる何らかの研究対象についての研究を出発させる研究者である、と言ってもよい。2代目は、初代と3代目との中間に位置して、本質的に初代の模倣と繰り返しであって創始ではない点で、初代から区別されるが、しかし、研究対象も研究方法も、初代の研究の延長上にある点で、3代目から区別される。言うまでもなく、ある研究領域の研究活動が、

次第に公認され正統化され、制度化され、権威づけられ、安定し確立するにつれて、研究そのものも、初代から2代目へ、2代目から3代目へと拡大し、進展していくのが学問研究の通例である。それに伴い、当然、研究の制度と組織が成立し、研究者は多種多様化し、研究者の層は厚くなり、「学界」は発展し拡大する。

まず、この初代から2代目、3代目への移行そのものは、研究組織や研究伝統の形成などを含めて、事柄のごく自然な成り行きであることは、指摘しておかなくてはならない。

しかし、問題は、単純化して言えば、初代においては、研究対象が出発点であったのに、3代目においては、研究方法が出発点となることである。言い換えれば、初代は、ある研究対象を見定めて、それを研究するために適切と信じた研究方法を創出し、その見定めた研究対象を明らかにすることに我武者羅に努める。これに対して、3代目は、既に存在し広く用いられている研究方法を採用し、その評価の定まった研究方法によって明らかにできると思われる範囲内でのみ、何らかの研究対象について明らかにすべく、いわば安心感に包まれつつ、「我武者羅に」ではなく、穏やかにスマートに研究に努める。

初代においては、そもそも、自らが創始し、発明した研究方法により、自らは明らかにしたと信ずる発見内容も、他の研究者によって評価されることが必ずしも保証されているわけではない。それどころか、さまざまな無理解や誤解に基づく否定的批判に曝される場合が多いのである。自然、初代は、他からの挑戦に対する応戦、弁護に力を注がざるを得ない。2代目は、初代の力によって、自らの研究の弁護に費やさなくてはならない労力は、少なくとも初代が要求されたよりは少なくて済み、研究そのものに集中することができる。いわば、初代の「大樹の陰に」守られている。3代目では、それどころか、研究の正統性は既に確立して、そもそも初代において、研究の存続さえ危ぶまれたなどということは、もはや微塵の影も残していない。むしろ、既に確立した権威に守られて、これこそが正統な研究であるぞよとばかりに、堂々と、自ら用いる研究方法が、かつては激しい批判から守るために、初代の必死の弁護を必要としたことがあったなどということはすっかり忘れ去り、いささかの恐れも不安も覚えることなく、心を安んじて研究に専念し、好意的な眼差しに迎えられて堂々と発表することができる。初代の心の拠り所は、自らが、対象の真実に近づいているという確信と、誤っているかもしれないという避けがたい不安を払いのけ払いのけしつつ、新発見の喜びに向けて自らを鼓舞する勇気である。2代目の心の拠り所は、初代が研究の上で尊敬と信頼に値する人物であり、初代によって切開かれたこの研究の道を歩む限り、その敵からはたとえ多少の抵抗があろうとも、存続を危うくされる攻撃からは守られており、将来への展望は明るく開かれている、という信頼と信念あるいは確信であろう。そして、3代目の心の拠り所は、周囲の多くの人々が、その研究方法の正当性を既に認めており、その方法を用いること自体に対して厳しい批判や否定を受けることなど、もはや全く考えられないこと、

そして、その研究方法による限り、何らかの意味ある結果が保証されているという安心感であろう。初代が、研究対象への接近についての不安と確信の間の揺れ動きを経験するとすれば、3代目は、同時代の周囲の研究者集団（例えば、大学とか学会などの学界）のなかで、自らの研究が正統的な研究として認められるという点についての保証を最初から与えられるという安心感を自明のこととして経験する。初代が、初めて荒れ野を徒手空拳で切開く未経験の開拓農民であるとするならば、3代目は、既に手入れの行き届いた耕作地で、今年も、初代、2代目の先輩農民に教えられた手順や手筈に従って耕作するならば、決った収穫がほぼ安定して得られることがほぼ約束されている農園経営農民である、とも言えよう。また、初代が、粗野で荒々しさを備えていても、しかし、目指す作品に向って一直線に進む純朴な気質の職人肌とすれば、3代目は、技術的には洗練されて繊細で、技巧に走る傾向さえある高度な技術者肌ということになる。和歌の好みでも、万葉集、古今和歌集、新古今和歌集と、人により好みの違いがある、と聞いたことがある。この違いは、初代、2代目、3代目の違いに対応するかも感じられる。

ここで、「初代、2代目、3代目」と表したのは、文字通りに「何代目」であるかということよりは、研究に対する研究者の基本的な在り方を、多様な含意をもつものとして表現している。江戸時代の川柳「売り家と唐様で書く三代目」を、現代心理学についても、ふと思う。

さて、研究領域が安定して、研究方法論が論じられるようになることによって起こる、「研究のルーチン化、機械的手順化、クックブック（料理書）化」には、概略、以上のような、研究者世代の推移が対応しているように思われる。そして、ある時代の断面をとるならば、恐らく、以上の意味での、多種多様な心理学のなかで、それぞれに、初代、2代目、3代目が並立し並存しており、そのことが、心理学の研究の多種多様性をさらに増幅し、助長しているのであろう。心理学の多種多様性は、以上のような研究者世代の差異の共存としても、現われている。そして、先に述べたYの構造化と序列化に当たっては、以上のことも考慮に入れる必要があるであろう。

方法を優先させ、とりあえず可能なところから手を付けようと、研究成果の挙がる見込みの立つ研究テーマにのみ取組む研究者と、研究の対象を優先させ、研究成果の見込みがあろうとなかろうと、対象そのものに向かって我武者羅に肉薄し取組む研究者との対比、それが、3代目と初代の対比である。3代目的な研究が増加するにつれて、心理学が対象とする研究内容は解決困難な根本問題から解決の容易な末梢問題へと重点が移り、根本問題が次第に忘れ去られていくことが起こる。例えば、キーンE.が鋭く指摘しているように、初期の心理学にとって根本的だった「心身問題」の現代心理学における忘却は、そうした事情によるとも考えられる。そしてさらに、心理学におけるこの根本問題の曖昧なままの放置こそが、今日の心理療法における精神治療薬学(Psychopharmacology)をめぐる深刻な諸問題を生み出し

ている、と彼は指摘している(Keen, E., 2000)。

それはさておき、ここに、心理学研究者たちを、発達心理学的に位置づける場合に、見逃してはならない一側面、心理学者における世代問題を見ることができる。さらに、心理学には、多種多様性のみならず、その多種多様性の克服を原理的に不可能にするかとさえ思われる事情が、加えてもう一つ存在することも指摘しておかなくてはならない。

9. 心理学の「本質的未完結性」：心理学は人間心理を変化させる

その事情とは、心理学という学問は、完成し完結することは決してない、ということである。そのことを、心理学の「本質的未完結性」と呼んでおこう。確かに、どのような学問においてであれ、研究者が本来もつべき謙虚さを考えれば、それぞれの研究は無限の探究であって「完成し完結する」ということは、いずれにせよ、あり得ないのだ、と言うべきであるかも知れない。しかし、心理学の場合、他の諸科学とは異なる独自の「未完結性」を、その本質としているのである。一方で、(A) 人間が、心理学を学び、心理学を意識することによって、その人間の「心」と「心理」が変化する。他方で、(B) 心理学が進歩あるいは変化することによって、人間の「心」と「心理」に変化が起こることが、心理学の基本性格として要請されている。心理学の本質的「未完結性」は、心理学が以上の(A)と(B)両方の条件と要請を満たそうとすることに起因する。

仮に、ある時期に、ある「心理学(1)」が出来上がって人々に学ばれたとしよう。そして、そのように、人々が「心理学(1)」を学んだことによって、人々の「心」に変化を生じたとしてしよう。すると、その「心理学(1)」を学んだ人々の変化した「心」を研究する「心理学(2)」が、次に要請されることになるであろう。「心理学(1)」以前の人々の「心」と「心の理」は、それ以後の人々の「心」と「心の理」は、異なるからである。例えば、精神分析学の出現以前と、その普及以後とでは、人々の「心」と「心理」には変化が起こった、と考えられる。たとえば、「言い間違い」は、出現以前には「単なる不注意だ」で済んだであろう。が、普及以後には、無意識との関連におけるその意味に考えが及ばないことはむしろ稀となった。そして、そうした変化を起こしたことこそが、それぞれの学問が求める学問としての力の現われである、とも考えられよう。例えば、心理療法を熟知した患者(例えば、専門の心理療法家である患者)と、心理療法に無知な患者(例えば、無学無知な患者)とでは、治療に当たる心理療法家にとって、顧慮すべきことは同じではあり得ないであろう。また、心理学専攻の学生は、心理学実験の被験者としては、実験者にとって、扱いにくい相手である、と指摘されている事実も同様の理由による。

そこで、「心理学(2)」は、「心理学(1)」とは、共通点もあるかもしれないが、相違点

をもつであろう。その相違点こそが、「心理学（１）」に加えて「心理学（２）」が要請された理由だからである。そして、仮に「心理学（２）」が出来上がって人々に学ばれたとする。すると、今度はまた、人々が「心理学（２）」を学んだことによって、人々の「心」と「心の理」に変化を生じる。すると、その「心理学（２）」を学んだ人々の「心」と「心の理」を研究する「心理学（３）」が求められるであろう。そして、「心理学（３）」が出来上がって人々に学ばれたとする。・・・・・・、以下、同様である。例えば、「嘘の心理学」を学んだ後の人間による嘘は、それを学ぶ前の人間の嘘とは、その嘘の巧妙さの水準を異にするであろう。心理学は、前と後とで、異なることは避けられない。こうして、詐欺は限りなく巧妙で狡猾と成る可能性を生じる。

このように考えると、多種多様な心理学の中には、「心理学を意識した／していない意識の心理学」、「多種多様な心理学を意識した／していない心理学者による心理学」、「多種多様な心理学を意識した意識の心理学を意識した心理学者による心理学」・・・・・・、などなど、多種多様な心理学が、論理的に無限に可能なものであり、現実にも、この点で、そもそも、そのように無限に可能な多種多様な心理学のうちのごく一部であるにせよ、心理学として実現されて存在しているであろう、ということになる。

「心理学を意識できる人間」の心理学と、ネズミ心理学さえ意識することが不可能だと考えられる「ネズミの心理」に関する心理学との間では、先行する心理学が人間あるいはネズミ、および後続の心理学に対して持つ意味に関して、根源的に異なる点があるということは、以上によって、明白であろう。

いや、心理学を学んでも、人々の「心」には変化は生じない、と言う論者があるかもしれない。すると、その論者は、言い換えれば、心理学は、人の「心」を変化させないことを宣言していることを意味する。それは、人間が、心理学によって明らかにされた「心」を意識しても、「心」に変化が起こらないことを意味する。仮に、「心理学（１）」が、そのような性質をもった心理学であったとしよう。すると、「心理学（１）」は、それで既に「完結した心理学」である、ということになるであろう。が、見方を変えると、そのような「完結した心理学」は、人々によって学ばれたとしても、人々の「心」に何らの変化も、もたらさないような心理学である、ということになる。これは、別の言い方をすれば、その存在が、全く現実的な実践性（有用性、有効性、実用性、実効性）を持たないような心理学である、ということになるであろう。言い換えれば、心理学研究の目標をそのような、「人間の心」に何らの変化ももたらさない心理学に置いた場合にのみ、「完結した心理学」が可能になるということ、を、意味する。

私は、心理学に、そのような非実践性（無用性、無効性、非実用性、非実効性）を積極的に求める場合は、稀であろう、と信じる。否、むしろ、心理学には、実現可能かどうかは別

として、最大限の実践性が求められているのが通例であろう、と私は考える。

すると、上記の論理によって、心理学の「本質的未完結性」が結論されることになる。

ただし、「限りなく完成に近い心理学」は考えられるかもしれない。それは、以下のような場合である。すなわち、

$$[\text{心理学}(m)] \doteq [\text{心理学}(m+1)] \doteq \lim_{n \rightarrow \infty} [\text{心理学}(n)] \quad n \text{は自然数}$$

mはある一つの自然数

これは、つまり、心理学(m)は、人々がそれを学んでも、もはやその「心」には、殆どなんらの変化も、もたらさないという状態にまで達した、そのように、心理学も人々も共に十二分に成熟したことを意味する。それゆえに、「心理学(m)」は、「心理学(m+1)」に限りなく近く等しいことを意味し、それは、その後、たとえ無限の探究をしたとしても、心理学はもはや変わらないこと、つまり、「心理学(n)」の系列は収斂し、「心理学(∞)」に限りなく近くなったということを、意味する。しかし、それは、その実践性という視点からは、心理学の進歩が殆ど全く止まったことを意味する。

仮に、心理学を実証性から解放したらどうなるだろうか。人間の心理の在り方を、自由自在に空想し、幻想し、妄想する心理学、これなら、あるいは、すくなくとも上記の「本質的未完結性」を超えることが出来るかもしれない。

あるいは、「心理学(m)」を門外不出とすることによって、「本質的未完結性」の克服が可能と成るかもしれない。これは、「秘教化」により「心理学(m)」の影響が、善悪をとわず、世に及ぶことを封じ、完結させる「本質的未完結性」克服への道である。

何時の日にか、心理学の「本質的未完結性」が何らかの仕方で克服されて、心理学が学問として完成される時が訪れるかどうか、さらにまた、そのことを喜ぶべきかどうか、私は未だ知らない。ただ、ここで指摘して置きたいのは、多種多様な心理学は、こうした、「実践性」あるいは「未完結性」という点に関しても、多種多様であるだろう、ということである。この点についての、多少とも詳細な議論は、(吉田章宏, 1986) および、(Yoshida, A. 1992年)に譲る。

おわりに

「心」そのものの変化と発達、および「心の理」についての把握・理解・認識・概念・知識の変化と発達について、(1) 任意の一人の個人としての人間の生涯における、(2) ある特定の心理学者の生涯における、(3) 人類の時代・社会・文化・世代の歴史における、そして、(4) 心理学の歴史における、多種多様な在り様を考えることができる。すると、(5) 現存する心理学の多種多様性は、これら、(1), (2), (3), (4)に見られる多種多様な

在り様と少なくとも対応していることが、考えられる。そこで、「多種多様な心理学を包括する『大きな理論的構造』」は、例えば、心理学によって探究されている(1)の理論構造を探索することにより、見いだされはしないか、という希望が湧いてくる。それと同時に、かすかにではあるが、それでは到達し得ない境地が何処かにあるのではないか、という懸念も芽生えてくる。そうした希望と懸念を背景に、これから、多種多様な心理学の理論構造を学ぶことを通して「多種多様な心理学を包括する『一つのより大きな理論的構造』」を求める試みを徐々に展開して行きたい。

具体的には、ピアジェ (Piaget, J.) の「発生認識論」、ヴィゴツキー (Vygotsky, L.) の『精神発達の理論』、メルロ＝ポンティ (Merleau-Ponty) の『行動の構造』、ジャクソン (Jackson, H.) の進化論的理論、ジャーネー (Janet, P.) の『人格の心理的発達』、エリクソン (Erikson, E. H.) の「ライフ・サイクル」論、ローレンツ (Lorenz, K.) が展開した系統発生的発達論(『鏡の背面』)、さらに、ゲーテ (Goethe, J. W.) の「認識段階論」、ヘーゲル (Hegel, W.) の『精神現象学』、その他が心理学に示唆するところを検討し、終わりに、空海(弘法大師)の『秘密曼荼羅十住心論』およびその略論を検討し、人間の心の発達論を透して見えてくる「多種多様な心理学を包括する『一つのより大きな理論的構造』」の可能性を探索し構想することを望んでいる。

しかし、その次には、以上のような理論構造の可能性を超える可能性も、さらに探究する必要が現われて来るであろうことも、既に現在の時点で見えて来ている。それは、多種多様な心理学の構造化そのものにも、発達の漸進的変化以外に多種多様性の可能性が十分に想定されるであろうからである。そうした構造化からの脱構造化の可能性さえも見えてくる。ここでは、目標を明らかにしつつ、さらに前進して行きたい。

引用・参考文献

- フロイト, S., 1999/1946: 生松敬三訳『自叙・精神分析』みすず書房
 フッサール, E., 1974/1954 細谷恒夫・木田元訳: 「幾何学の起源」
 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社 386-413
 南 博, 1993『原典による心理学入門』講談社学術文庫
 西平 直, 1993: 『エリクソンの人間学』東京大学出版会
 佐藤幸治・安宅孝治編, 1975: 『現代心理学の系譜: その人と学説と』全3巻 岩崎学術出版社
 志賀直哉, 「ナイルの水の一滴」, 全集第七巻, 岩波書店, 647
 ユクスケール, 1973: 日高敏隆・野田保之訳: 『生物から見た世界』思索社
 吉田章宏, 1986: 「授業の完全理論への道」学校教育研究, 1. 日本学校教育学会, 84-96
 吉田章宏, 1996: 「多様性を通じての統一性: 遍歴と彷徨の跡から」
 岩手大学教育学部学会報告書 第11号, 49-59
 吉田章宏, 2003: 「心理学研究方法論をめぐる省察—心理学の多種多様性について」
 淑徳大学社会学部研究紀要 第37号, 149-165

- Becker,E., 1973 : *The Denial of Death*. Free Press
- Brentano, F., 1973/1874:*Psychology from an Empirical Standpoint*. RKP
- Keen, E., 2001: *A History of Ideas in American Psychology*. Praeger
- Keen, E., 2000: *Ultimacy and Triviality in Psychotherapy*. Praeger
- Weinsheimer,J.C.1985 : *Gadamer's Hermeneutics*. Yale UP
- Yoshida, A. 1992: On the Impossibility of the Perfectly Empirical-and-Practical
Theory of Teaching. 東京大学教育学部紀要, 第32巻, 257-264
- Yoshida,A.,2001: My Life in Psychology: Making a Place for Fiction in a World of Science.
Journal of Phenomenological Psychology. Vol. 32. No.2. 188-202

A Meditation on the Research Methodology in Psychology —On the Possibility of Integrating Diverse Psychologies—

Akihiro YOSHIDA

This paper continues, while following the track initiated by the preceding paper (Yoshida, A., 2003), its exploration into the possibility of integrating diverse psychologies observed in the contemporary scene. The objective of this exploration is simple and clear: to discover the way to “a larger theoretical structure” (Becker, E.), which is capable of including all opposing views found in the diversity of psychologies.

A preliminary attempt has been made to clarify the logic of the approach toward “a larger theoretical structure.” First of all, the “larger theoretical structure” being sought should be the only one, i.e., not plural but singular, by the very definition of the structure. However, there will be plural ways toward the theoretical structure since these ways will be multiple depending on the starting points and the choice of the possible ways. At present, there regrettably prevails mutual contempt, whether open or hidden, among diverse psychologies. Thus, if each psychology were asked to present the “larger theoretical structure,” then each will at best give a structure, placing itself on the top in the ranking, which will not at all satisfy any other opposing psychologies. This will certainly be a deadlock. In other words, by the very logic of coexisting psychologies with open and/or hidden mutual contempt, any existing self-believing psychology is not qualified to present the structure being sought. Some other detours will become necessary for discovering the “larger theoretical structure.”

A rough sketch of an imaginative great river Nile is presented, the river simultaneously containing and overlapping: 1) the personal histories, in terms of psychological ideas, of any human beings, 2) the developmental histories of psychological ideas of all individual psychologists, 3) the history of psychological ideas of humankind in various historical periods, societies, cultures, generations, and 4) the history of various kinds of pre-psychologies and psychologies. A many-many correspondence is presented and examined between the set of diverse presently existing psychologies, on the one hand, and the set

of diverse people respectively believing and supporting those diverse psychologies, on the other. A way to discover the structure to order diverse psychologies is proposed by looking through the structure ordering the people believing in respective psychologies. Some foreseen obstacles to this attempt have been pointed out: 1) the lack of historical viewpoints in natural scientific psychological research studies; 2) the diversity of the nature of research studies among the first, the second and the third generations of psychologists; and 3) the impossibility of perfecting the discipline of psychology because of the inevitable transformations of the psyche from the “before” to the “after” of knowing a psychology.

Regardless of these obstacles, attempts will be made further to discover the way toward the structure giving order to diverse psychologies by way of looking at them through the developmental psychological “stages” of people respectively believing in each of these diverse psychologies.

Yoshida,A.,2003: A Meditation on the Research Methodology in Psychology: On the Diversity of Psychology. *Bulletin of the College of Sociology*, Shukutoku Univ. No.37. 149-165